
神薙姫～かなき～She is killer of Gods

城島優矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神薙姫くんなきくShe is killer of Gods

【Nコード】

N9352C

【作者名】

城島優矢

【あらすじ】

普通の女子高生（？）だった富良野舞。それが突然異世界召喚！？普通なら慌てるはずが、何かちゃっかり順応しちゃって……。魔法系バトルコメディ、パロディー重視で突っ走ります！ブログから多少修正してこちらへ移行中。

プロローグ（前書き）

パロディ要素が大きいです。たまに著作権侵害の恐れがあるため、伏せ字が出てくる場合がありますが、その場合、感想等でも伏せ字にしてください。

プロローグ

「ひゃああゝ大丈夫ですかあゝ!!」

痛ったあぁっ!! 何? 何なの? ひょっとして何かの呪い!

? この間焼却処分した邪神モツコスの呪いッ!? いきなり身体中がジオダイン喰らったようにものごつつ痛いんだけど、この上なく! いやーん、あたし、この年でフィギュア焼いて死んじゃうの? メリーさんならぬモツコスさんでッ!

「あわわわわ……床に這い蹲って口から謎の液体を吹き出しながら蛇がのたうち回るみたいに身体をぐねらせてあさっての方向を見ながらうめき声を上げないでください! 怖いです、助けておかあさーん!!」

うつわー、しかも頭の上から、あたしの心直撃激ラブの甘ったるい可愛い声が聞こえてくるぅ。なにになに? 何か分かんないけど、身体の痛みと反比例して心は妙に高ぶってまいりますよ、あたしとしては!

こうしちやいられない、声の主を一目でも見なければッ!

あたし(十六歳。高校一年生)は最後の力を振り絞って瞳を頭上に向けた。鼻息が荒々しく吹き荒れているけど気にしない。それがあたしのスタイルさ! 女の子ダイスキッ!

その顔を上げたあたしのつぶらなお目々(当社比)に飛び込んできたのは、澄んだ青空のような髪の色をしためがっさ可愛い外国の女の子だった。おっきな金色のイノセントアイズがあたしの脳を貫くよ!

こりゃ眼福だよ、マジで。一度は見とかないと人生後悔するね、絶対。

しかし、何か格好が浮ついちゃってる。何て言うんだっけ? コスプレ? そう、それだ。魔術師の。どっかの魔法学校の生徒が着ていた制服に近いね、黒いマントしてるし。指揮者が使うタクトみ

たいなの持ってるし。つーことは、ここ、コスプレ会場？ でもあたし、何でこんなところに居るんだろ？ 確かさっまでいつものメンバーと話しながら下校していたはずなんだけど……。

ふむ……見慣れない天井だなあ、漆喰？

身体の痛みが引いてきたので、そのまま仰向けになってしばらくぼうつと見慣れない天井を眺めていると、あたしの視界にさっきの女の子が割りこんできた。少し不安そうに眼に涙をためて……何か恐れてね？ あたしの事。

「あ、あうあう……あの、その、言葉通じますかー？ 出来れば通じて欲しいんですけど、お願いですー……あなたは、どなたですかあ？」

あれ？ さっきから何か違和感あったけど、これが原因か。全く訛りのない流暢な日本語だ。この子、生まれてからずっと日本で暮らしてんだろーか。ま、それはともかくとして、答えてあげないと。声の感じからするに何かミョーに怖がらせちゃってるし。

あたしは手について身体を捻ると部屋の床に三角座りで座り直した。

それからとびっきりの笑顔を浮かべて（第一印象はやっぱり大事だし）女の子の問いに答える。

「あ、あたし？ あたしは富良野舞。そんな怖がらないですよ。とって食べたりしないし」

あたしが優しく、もう真心を込めてそう言うと、女の子は幾分緊張をといたみたいだった。ホッとした顔が物凄く可愛い。よしやつ。ガッツポーズを取るあたし。もちろん心の中でだけ。

女の子はあたしの名前を二回ほど反芻した後、首をかしげて聞いてきた。

「フラノマイ……さん？ 変わったお名前ですけど、どこからいらつしゃったんですか？」

変わった名前って……よくある名前だと思っただけだなあ……。ちよっと傷ついたけど、今は質問に答えてあげるのがいいかな？ つ

っても、こっちもよく分かんないんだけども。

「どこから来たかって……それはあたしもよく分かんないんだけど、あたし、確か学校の帰りだったはずなんだよね。だったらここ東京かその周辺でしょ？ ビッグ○イトとか？」

「はい？ トウキョウ？ ビッグ○イト？」

すると、その女の子はキョトンとした顔でまるで初めての単語を聞き返すようにでオウムがえしで聞いてきた。

アレー……何かこの感じてやな予感がバリバリの中しそうなんですか！ そう、マンガとかラノベとかでは気付くといきなり異世界だったって展開の。

いっやー、さすがに、そんな安直な展開があるわけ……。

「エトナ、一体何をどうしたら錬金魔術で人が召喚されるわけ？」

おわっ！ いきなりあらぬ方向から誰かの声がつ！ そして、聞こえる笑いの大合唱。他にも人がいたんだ。気付かなかったよ。あたしってば、一つのことに集中すると、周りが見えなくなる質なんだよね。

慌てて周りを見回してみると、女の子と同じような格好をしたあたしと同年代くらいの女の子と男の子が時々こつちを指差したりして、あたしを物珍しそうに見ていた。

むう、何か傷つくなあ……。

「あう……どうしてなんでしよう？」

目の前の女の子がみんなの視線を受けて、縮こまりながら困ったように声を出す。

「何か間違えちゃったんでしようかあ？」

「間違えたって……確かにエトナはよく魔術を失敗するけど、こんなトンチンカンな失敗は初めてだよなア」

「でも、やっぱり失敗したんだな、お前。やっぱ向いてないんじゃないか？ 魔術師に」

ん？ 何か展開が見たことあるカタチに……デジャビュ？

あたしが首をかしげた直後、人垣から起こる大爆笑。そこであた

しは気付く。あー……これ、魔法使いの桃色髪のツンデレ少女の出てくるラノベの最初とよく似てるんだ。と、言うことは、これは多分、それを元にした演劇か何かなんだねえ。納得納得。すると、この女の子がヒロイン役であたしが主人公役って事か。

あたしとしては、ツンデレなヒロインも好きだけど、こういった気の弱そうなヒロインの方が好みだなあ。守ってあげたくなっちゃう。

しかし、それでも疑問は残るね。これが演劇だとして、あたしは脚本も台本も持ってないし。そんなことより、あたしが何でこんな演劇に参加しているのかが分からない。新手のドッキリ？　とりあえず、聞いてみようか。確か、この子の名前は……。

「えと……エトナ……ちゃんだっけ？　一つ聞いていい？」

すると、あたしの前にいた女の子はびくりと肩を震わせると、

「あ、はい……何でしょうかあ？」

震える声で言ってきた。いや、怖がなくていいから。マジで。

ま、とりあえず気を取り直して、と。

「あのさ、これドッキリなんでしょ？　もう分かっちゃったから種

明かししてもいいよ？」

……………。

一瞬、周りが静かになった。やっぱバレた事に動揺してんのかな？　それとも、あたし、最後まで騙された振りしとくべきだったのかな？　そっちの方が面白かったかも？　あっちゃー、あたしひよっとして空気読めなかった？　だからみんな固まっちゃってるわけ？

しかし、誰がこんな手の込んだことを……考えられるとしたら、あいつらだけだ。一緒に下校してた、あたしの親友。全く……後でシめておこう。

……あれ？　何か様子がおかしいな。みんなが顔を見合わせて何か言ってる。えーと……「ドッキリって何のこと？」「何言ってるんだ、あいつ……」……。

それを聞いたあたしの心を一抹の不安が通り過ぎる。

それを見計らったかのように、エトナちゃんがこちらの顔を覗き込んできた。

「あの……ドッキリって何のことですか？ あたし達はいつもこんな感じですよ？」

「え？」

エトナちゃんは嘘などついていない、真摯な瞳で言ってきた。

絶句するあたし。凄く嫌な予感が頭の中を渦巻いていく。どんどん広がっていく。

……これを聞いて、外を確かめたら、あたし、気絶するかも。

でも、聞かないと。いつまでもこんな状態で居るわけにはいかなしいし。

いや、大丈夫よ、そんなこと、マンガやゲームの中だけなんだから。みんな嘘ついてるんだ。きっと大丈夫。うー……よし！！

唇を舌で三回舐めて、十分に湿らせる。それからあたしは自分に言い聞かせるように強く頷くと、エトナちゃんに聞く。

「ゴメン、変なこと聞かかも知れないけど、ここ、どこ？ 東京だよね？」

半分自分に言い聞かせながら。確かめるように。

「あの……そのトウキョウ……というのがどこだか分かりませんが……ここはアルト大陸トリスティア東部にある『トリスティア魔術学校』ですよ？」

エトナちゃんはそう、当然のように口にした。

周りからクスクスとした笑い声が漏れる。それはあたしが当たり前のことを聞いたから笑っているのか、それとも今のあたしの顔があまりにもおかしなカタチで固まっているから笑っているのか。

そんなことはどうでもいい。

まだ、嘘だって可能性がある。

あたしは心にまとわりつく嫌なものを振り払って立ち上がると、一目散に、あたしから一番近い所にあった窓に向かった。

そこにいた人を払いのけ、力任せに開け放つ。

そこに映し出されたのは、今までに見たことがないくらい透き通った青空と、一面の草原。遠くにある洋風のお城。そこには住み慣れた東京の面影など、どこにもなかった。

呆然として、あたしは空を見上げた。そこで、決定的にあたしの世界とは違うものを見てしまった。それは……。

空に浮かんだ、二つの連星の太陽だった。

「な……何よ、これえええっ!!」

あ、あはははは……あり得ない。まさか、こんなマンガみたいな事が起こるなんて。

全てを悟った。あたしは文字通りどつかのラノベよろしく、異世界に召喚されてしまったのだ。ぶっちゃけありえない。

アレ、何か、身体から力が抜けていく……あ、何か意識も無くなりそう……。

薄れゆく意識の中、あたしは、ああ、もしこれが夢で、次に起きた時にはフツーに家のベッドで寝てたらなあ……とかベタな事を考えつつ、意識をブラックアウトさせた。

第一章 「すみません、あたしブロッコリーとカリフラワーの区別が出来ない」

パロディ要素が大きいです。たまに著作権侵害の恐れがあるため、伏せ字が出てくる場合がありますが、その場合、感想等でも伏せ字にしてください。

第一章 「すみません、あたしプロッコーとカリフラワーの区別が出来ない」

「どーっどーまん、せーまんっ！」

.....

どうも、お見苦しい所をお見せしました。何か陰陽師が踊っている夢を見ていたもので……。あ、そうそう、ちゃんとした自己紹介がまだだったような。それでは名前から。

あたしは富良野舞。十八歳高三。ちよつと平均以下の身長（150センチ弱）とト〇〇クの山〇奈〇子も裸足で逃げ出す希少種の超貧乳、それにポニーテールにまとめた艶やかな黒髪ロングが自慢の、健康優良、健全な女の子なのです。好きな物はアニメ、マンガ、ラノベ、テレビゲーム、年齢制限付きパソコンゲーム、特撮、そして可愛い女の子。もちろん、ニコニコ動画は毎日鑑賞。YouTubeもダウンロードしまくりなのですよ。いえ？ オタクじゃないですよ？ ちよつとそっち方面に理解が深いだけなのです。その所を理解して貰わないと。マスコミ関係はそのこの区別がなっていないわけで……。

おおっと、少し脱線してしまいましたね。ま、そんなこんなで楽しい毎日を送っていたのですが……何の因果かあたしはここににいるわけで……。ちよつと深いため息。

あたしは頭を三回振ると、布団をはね除けて上半身を勢いよく起こした。

見慣れない部屋に一瞬戸惑い、思わず周りを見回す。もう、これは仕方ないね。

この臭いは……消毒液？ つー事は、ここは病院か何かかな？

少なくともあたしの家はこんな消毒液臭くないし。

頭打ってあたしの世界の病院にでも運ばれたと思っていたくて窓をチラリ。しかし、そこに広がるのは記憶が途切れる前見た風景そのも

の。太陽二つも覗いてる。

やっぱ夢オチとかそんな事はなかったかー。ちえっ。ちよつとは期待してたんだけどなあ……。

ふふん、黄昏れるあたしは何時にもまして決まってるねえ。三割り増しだねえ。

しっかし、ここ、ホントにどこなんだろ。太陽が二つあったのが、あたしが脳梗塞でも起こしてない限り事実であるのは当たり前なのであって、ここはあたしが暮らす、銀河系の太陽系第三惑星『地球』ではあり得ないことが明白なわけでありますよ。みなさん。

うーん、これがアニメとかだったら、面白そー……とかですむんだろうけど、実際問題あたしは体験しちゃってるわけだしなあ。ここに来て、異世界とかに飛ばされた主人公達の気持ち的理解出来たよ、一生体験したくなかったけどね。うーん、分かりやすく言えば中東ら辺に行って武装集団に拉致られた時の気持ちにソックリだね、されたこと無いけど。

ま、そんなわけで、足場がぐらつきまくって嫌な感じ。とにかく、今居る所、この世界のシステム、常識を調べないと……落ち着くことなんか出来やしないし。しかし、それ、どうやって調べようか……。さっきの子……エトナちゃんとか言ったっけ……あの子がここにいれば、色々聞けるんだけど……居ないしなあ。

とか考えていると、こちらに向かって歩いてくる足音が聞こえてきた。人数は複数。ひよつとして、この部屋に向かってきてるんだろうか？ もし、そうなら、入ってきたときに色々聞いてみよつと。

あたしは独りごちるとその足音に耳を澄ました。

案の定、あたしが居る部屋の前で止まる足音たち。コンコンツと軽いノックの後……。

「し、失礼しまーす……」

イチゴシロップに蜂蜜を垂らしたような甘ったるいぷりちーボイスと共に先頭を切って入ってきたのはあの子、エトナちゃん。何故か頭を抑えて涙目になっている。ちよつと心配。何かされたのかな？

エトナちゃんはあたしが目を覚ましたのに気付くと、ホッとした表情を浮かべて、

「あ、起きてたんですかあ、よかったです」

にっこりと笑った。ああ、その笑顔、襲っちゃいたいくらい可愛
いよう。この子の笑顔を見ると今あたしが居る状況なんかどうで
も良くなってくるね。これ、正論。

あたしがその笑顔を幸せな気持ちで眺めていると、エトナちゃん
の後ろからぬっと白衣を着た二十代後半の女の人はこちらを覗き込
んできた。眼鏡が似合う知的な女性。女教師って感じ？

「ん、起きたみたいね。どう？ 頭とか打ってない？」

エトナちゃんから話を聞くと、自分たちの担任兼、保険医なのだ
そーだ。そして、あたしが今まで寝ていたのはこの学校の保健室。
どうやら気絶してしまったあたしをクラスメートたちと一緒に運ん
でくれたらしい。

「あ、ありがとうございます。ご迷惑をおかけして……」

「あ、いいっていいって。迷惑をかけてるのはこっちの方が大きい
んだから。気にしないでいーよ」

エトナちゃんの担任で保険医の先生は気さくに笑うとエトナちゃ
んの頭を叩きながら、こう続けた。

「この子のせいで、どっかから飛ばされて来ちゃったんだって？

全く……錬金術の先生から聞いたけど、ホントに呆れたわー。一体
どこをどう間違えたら錬金術の呪文が召喚の呪文にすり替わっちゃ
うのよ。しかも、こことは違う別世界から喚んじやうなんて……」

あ、あ、エトナちゃんが可哀想……。さっき頭を抑えていた理由
はこれか。でも、痛そうに顔をしかめてるのも、可愛いなあ。……
って、今、先生なんか確信めいた事言ったような……。言いましたよ
ね？

「ん？ ああ……あなたが異世界から召喚されたって事？ この子
からあなたが聞いたことのない変な地名を連呼してたって聞いてた
からトレースの魔術を使ってみたのよ。プライバシーに踏み込むこ

とになるけど、こちらの手違いで召喚されたわけだし、聞いたことのない単語を使っているって事は、もしかしたら異大陸から召喚されたのかも知れないじゃない？ そんなわけでそれを使ってみたんだけど……驚いたわ。まさか、この世界以外にも別の世界があるなんてね。宇宙学の異端者の戯言だと思っていたけど、こうもあたしの目で確認しちゃったからねえ。信じざるを得なかったわけよ」

そう言って、肩をすくめるエトナちゃんの担任。

お、初めて掴んだ確かな感触。これは期待出来るかも。

「あ、そうなんですか……なら、あたし、帰ることも出来るんですよね？」

思い切ってそう聞いてみると、先生は急に表情を曇らせた。

「え？」

「ごめんなさいね。その……凄く言いにくいんだけど、異世界から召喚された例は今までなくて、あなたが初めてのケースなの。そのために帰すやり方が分からなくて……。あー……でもね、確かに召喚したモノをその地に帰す魔術は存在してるのよ。それは召喚時に用いた魔術を正確に逆詠唱することで可能になるの。それを試してみたかったんだけど、今回の場合、この子はどこをどう間違ったのか、錬金の魔術使用中に召喚の魔術を発動させてしまった。しかも、その間違った箇所がどこかも分からないらしいの。これでは……あなたを元の世界に帰すための魔術が発動出来ないのよ。本当にごめんなさいね？」

「そんな……」

さっきの先生の言葉に淡い希望を抱いていた私は再びどん底に突き落とされた。

しょぼーん。

「あ、えーと、あなた、そんなに落ち込まないで。まだ、完全に還れないと決まった訳じゃないから！ とにかく、色々文献をあさって調べてみるから……希望は捨てないで」

先生は月並みだけど、そう言って励ましてくれた。でも、それっ

て可能性がないから言う台詞なんですよねー。奇跡は起きないから奇跡って言うんですよう？

でも、先生はあたしのそんな心情には気付かず話を進める。

「えーと、それで悪いんだけど……あなた帰るまでこっちの世界にいたくちやならないじゃない。衣食住はこっちでどうにかしてあげるわ。もちろん、タダって訳にはいかないけど……」

「え……それを用意してくれるのはそれはありがたいですけど……あたし、お金とか持ってないですよ？」

「うん、それは分かってるわ。その代わり、あなたのいた世界の話と、ちよつとした雑用をやって貰いたいのよ。ちようど、あたしも助手が欲しいと思ってたところだね。どう？ 給料とかも出るわよ？」

「あ……ハア、それはいいですけど……何であたしの世界の話なんか？」

そんなの聞いて、どうするんだろうか、この人。

「そりゃあたしも宇宙学者の端くれだからね。全く違った発展をした文化には興味あるのよ」

「あ、なるほど。納得しました」

「そう。で、どうする？ 悪いようにはしないつもりだけど」

「えー……と」

うーん、確かにあたし行くとこないしなあ……。でも、いきなり見ず知らずの人間に全てを任すって言うのも……。

そんな風にあたしが決めかねていると、先生はニヤリと笑って、「あ、一つ言っておくと、住む所なんだけど……ちようどこの事件の張本人であるこの子の寮の部屋が二人部屋でね。それまた一人分余ってたのよ。だからそこに住んで貰おうと思って。どうするマイにゃん、この子と相部屋よん？」

「お引き受けしましょうっ！」

フフン、人は時として人を心から信用しなくてはならないのだよ。別にエトナちゃんと相部屋になってめくるめく熱い一夜を過ごせる（かもしれない）から即答した訳じゃないんだからねっ！ そう、

これは生きていくために大事なこと。ああ、働くって素晴らしい……。

……信じれ。

すると先生はうんうんと頷きつつ満面の笑みを浮かべて、エトナちゃんをあたし前に押し出してきた。

「それじゃエトナっち。案内お願いねえー」

最後にそれだけ言う先生は保健室からそそくさと退散していった。何か用事があるらしい。

保健室に二人だけ残される。

ああ、このシチュエーション、フラグ立ってたらお楽しみシーンに突入してるんだけどなあ……。

はっ、あたしったらまたこんな事考えて……いかにいかに、顔に出てたら最悪だ。バッドエンド直行フラグが立ちまくりだ。

よし、こういう時は会話をして取り繕おう。

「あの、エトナちゃ……」

「あの……その……本当にゴメンなさいっ」

あたしが口を開いた瞬間に、エトナちゃんは頭を床にぶつけるんじゃないかというほど思い切り頭を下げて、あたしに謝ってきた。

呆氣にとられるあたし。

「あたしのせいで……全く勝手の分からないこんな世界に召喚してしまって……本当に謝っても、謝り切れません……しかも、帰れないなんて……そんなの……」

エトナちゃんは頭を下げたまま、肩を震わせる。顔からポタポタと床に水滴を垂らしながら。

あ……泣いてるんだ……。あたしのために……。

そんなエトナちゃんを見ると、心から愛しくなって、あたしは思わずベッドから起きあがると、彼女をしっかりと抱きしめた。

「大丈夫。大丈夫だよ、エトナちゃん。確かに、すぐに帰れないのは哀しいけど……先生はきつと帰る方法を見つけてくれるから。それにあたし、気にしてないから。あなたが故意にやったなんて思っ

てないから。だから、ね。泣き止んで。これからあたし達友達なんだから。多少の失敗なんて、目を瞑るよ」

よし、あたし！ いい事言ったっ！

「ともだち……本当ですか？」

エトナちゃんが泣きはらした目でこちらを見てくる。上目遣いが非常に良し。

「ん……本当だから」

エトナちゃんの頭を撫でながら優しく言う。何か、お姉さんにでもなった気分だ。

すると、エトナちゃんは今までで一番良い笑顔を浮かべた。

「ありがとうございます……えと……」

「舞でいいよ」

「あ、はい……ありがとうございます。マイさん」

エトナちゃんはそう言って抱きついてくる。柔らかい感触があたしの身体に触れてくる。ふおおおおおっ！

キタ——（。▽。）——ッ！！？

グッドエンドルート確定よっ！ やりいっ！

しかし、エトナちゃんって着やせするタイプなのねえ……出るとこはしっかり出て……ウエストは凄く細い……。

それに凄く良い匂い……。あー……何か理性が焼き切れちゃいそう……。

でも、襲っちゃうとバッドエンドフラグが……くう……これは蛇の生殺し……辛いつす、拷問つす。

む、むむむむむむむむむむむっ！！ う、動けないい……

（涙目）。

……この後、この甘美なる拷問は十分間続けられたのだった。よく耐えれたな……あたし……。

「あ、マイさん、ここがあたしの部屋ですう」

ウキウキとした顔で指差してくれた先を見る。

そこにあるのは一つの木の扉。どうやら、ここがエトナちゃんのお部屋らしい。見た目は馬小屋程度の木で作られた小屋。物置と言っても良いくらいの大きさだった。ふむ……。どう見ても寮じゃないよね、独立した小屋。

こんな可愛いこの部屋について文句言いたくは無いか。けど。

第一印象、日当たり悪い。ここ、完全に朝日も夕日も入らないよ？　まだ夕方なのに真っ暗だよ？

ここ、トイレからも一番遠いし、第一あたし達が居た校舎から一階外出て、真っ直ぐ行って右にばーっと曲がってすぐに左にバキッと曲がって直進した先を右回転した先にあるんだけど……そりゃ、ここ他にルームメイトなんか居ないよ。つか、なりたがらないってのが本音かな。この部屋、どう見たって壊れかけの小屋にしか見えないうもんなあ……。そこを挟むようにして三階の校舎だか寮だかが二連建っている。だから必然的に日当たり最悪。日照権完全無視だよ、ったく。

あたしが呆然としてそのオンボロ小屋を見ているその様子に気付いたのか、エトナちゃんが申し訳なさそうに笑ってきた。

「あ……あはは……やっぱ引いちゃいますか？」

ほふうっ！　あうう……エ、エトナちゃんが悲しそうな顔であたしを見てくるよう。蒼く澄んだ瞳の無垢な光があたしの心を激しく揺さぶる。もう、船酔いしそうなくらい。と、とりあえず、あやまんなきゃ。こんな所でも、エトナちゃんのお部屋なんだし。住めば都。多分そーなのよっ！　強引にそう決めとく。この間零コンマ三秒よん。

「あ、ご、ゴメン、あたし変な顔してた？」

「あ……えと……そうですね、ショック受けちゃいますよね、こんなボロ小屋なんて……」

ああん、落ち込んだ顔も可愛いわっ！　お持ち帰りいーしたいっ！　そんなヤバげな願望を心の奥底へ押さえ込みつつ、あたしはピッ

と指を立てるととびきりの笑顔を浮かべるとこう切り出した。

「ふっふーん、何言ってるのかな、エトナちゃん、あたしは感動していたのだよ」

「ええっ！」

エトナちゃんはあたしの言葉を全く予測していなかったのだろう、目をいっぱいに見開いて驚いてきた。あたしは心の中でほくそ笑むと、こう続ける。

「だって、何かこの小屋趣があるって言うか、レトロな感じで、あたしの趣味ど真ん中って感じなのさ。この壁の黒ずみ具合なんて、もうサイコーよっ！」

「あの、それはただ単にカビてて……それに、ここ、お日様当たらないんですよ？」

「それは大丈夫さ！」

だって目の前に、あたしを照らす可愛い太陽があるからね。そんなこと、些末な問題さっ。さっきと言ってることが違うかもだけど、人の心はいつでも前向きが一番なのだよ。アンダスタン？

「そんな訳だから、中に入る。あたしちよつと落ち着きたくって」

「あ、そう言うことなら……散らかってますけど、どうぞですう」
あたしが話を切り上げるようにそう言うと、それまで少し合点がいかない素振りをしていたエトナちゃんだったが、ようやく軽く頷いてくれた。

「少し待ってくださいね。えと……」

エトナちゃんはそう言うのと部屋の鍵に手をかけて、なにやら聞いたことのない言語を口にした。これが呪文なんだろうか？

その言葉が言い終わると同時にカチャリツと南京錠の開く音が消えた。

どうやら、さっきの言葉は解錠の呪文だったみたい。と、言うことはこの世界って鍵とかは魔術を使って行っているものなのか。それって便利なような不便なような……魔術を使える人は良いにしても、使えない人とかはどうしてるんだろ。まさか、開けっ放しって

事はないよねえ……日本の田舎じゃあるまいし……。

と、そんなことを考えていると……。

「あのーマイさん、ドア、開きましたけど……」

エトナちゃんが申し訳なさそうに言ってきた。

「あ、ゴメン、少し考え事してて……あたしから入って良いの？」

「はい」

あたしは笑顔で返事するエトナちゃんに導かれながら二人の愛の巣になるであろう小屋の中に期待半分、不安半分で足を踏み入れたのだった。

そして、その割合は不安100パーセントになって振り切れたのだった。

小屋の中は薄暗く、勉強机とベッドが二つずつ設置してあった。

……多分、そう捉えたら良いんだろうけど。もっと分かりやすく言いかえると、五十センチ四方の木の箱が二つ小屋の奥両片隅に、それとは反対側、つまり入り口側には人一人が寝転がれるくらいの大さきのわらの束が二つ無造作に敷き詰められていた。

ここはアルプスの山頂ですか？ 助けておじいさーんっ！

しかも、小屋の床はあちこち腐っているのか穴が空き、ともに歩くことが出来るのか凄く不安になる状態だった。

ちよっと、これはあんまりでねーのかい？

「……あの、マイさん……どうしたんですか？ ……あ……やっぱり、こんな部屋、嫌ですよね……あたし、先生に言ってマイさんの部屋、替えて貰ってきます！」

入り口に立ち止まって沈黙するあたしの心情を察したのか、背後でエトナちゃんがそう言ってきた。

と、同時に走り出す音。

あたしは慌てて振り向いた。当たり前じゃん。さっきの声、すごく悲しそうな声だったし！

振り返って見るとエトナちゃんは校舎に向かってもうずいぶん離れた所まで走っていった。うわ、結構走るの速いんだー。

って、んなこと感心してる場合じゃないでしょ、あたしっ！

ここで呼び止めなきゃ、女が廃るってもんよ。

「ちょっと待って、エトナちゃんっ！」

お腹の底から、感情を込めて叫ぶ。そりゃもう、狙ったように悲壮感を出して。

これなら絶対止まってくれるよね。

案の定、エトナちゃんがこちらを振り向いて止まってくれた。もう、素直な娘なんだからー、うふふ。あたしは心の中でよっしゃっ
と頷くと一目散にエトナちゃんに走り寄った。

「ハア……ハア……ちょっと……待って……エトナちゃん……足、速過ぎ……」

あの一瞬で100メートル近く離れるとは……この子、運動神経はあたしより良いみたい。これでもあたし、剣道やってて足腰には多少なりとも自信あったのに……。

ちっとばかり、自分の自信を喪失したけど、ま、それはそれとして。今はそれよりも……。

あたしは深呼吸して息を落ち着けると、エトナちゃんに微笑みかける。

「もう、エトナちゃんいきなり走り出すなんて、あたし驚いちゃったよ。どうしたの」

まー、走り出した理由は十中八九理解してるけど、こっちは気付いてないふうを装わなきゃ。そっちの方が聞かれた時、色々答えやすいしね。

エトナちゃんはあたしの顔を見て、少し言いくさそうにしていたが、意を決したのか自分の胸の前で右手を握りしめると、

「……だって、マイさん、部屋の中を見たと同時に石化にかかったみたいに固まって……、あたし、やっぱりあの部屋の様子がショック受けたんだって思ってた……そりゃ、そうですよね。小屋自体この学校の外観ともマッチしてませんし……。普通はみんなベッドで眠るんです。あの寮に入って」

エトナちゃんはあたしの背後の建物を指差す。少し羨ましそうな顔をして。

「でも、あたし、魔術の才能ほとんど無くて……最下位クラスよりもっと下なんです。この学校は実力本位制で、実力のある人ほど優遇されるシステムになってるんです。トップクラスになると寮なんかも部屋が大きくて、きれいで一人部屋だし。学費が免除されたりします。でもあたしは最下級中の最下級……いつ、この学校から退学にされてもおかしくないんですが……お父さんがこの学校に寄付をしてくれているため、まだここにいらることが出来てるんです。もちろん、待遇は最悪ですが」

エトナちゃんはここで息を大きく吸い込んだ。何か、大事なことを言おうとしてるみたい。顔が凄く、真剣だ。

「でも、そんなの卑怯じゃないですか。あたしと同じ立場の人は次々と辞めさせられているのにあたしだけ、ここに残って……だから、あたし決めたんです。少しずつでもいいから這い上がっていきうって。きっと、お父さんたちもそう願ってるって思ってる。だから先生に無理言って少し上級の魔術を教えて貰っていたんですけど……まさか、こんな事になるなんて、思ってもみなくて……」

……こんな事ってのは、もしかして……。

「あ、はい。マイさんのことです。本当に申し訳なくて……それなのに……ただ、巻き込まれただけなのにあたしと同じ待遇になってしまっ……そんなの理不尽です。マイさんは被害者なのに……だから、あたし、先生に掛け合って最上級……とはいかないまでももう少しマシな部屋を用意させてもらいます。そうしないと、やっぱりあたしの気が済みませんから！」

そう言って再び校舎に向かって走り出そうとするエトナちゃん。

あたしはその手をしっかりと掴む。

慌てて振り向いてくるエトナちゃん。

あたしは驚いた顔をするエトナちゃんに首を振って答えた。

「行かなくて、いいよ」

「でも……」

お、少し決意が揺れたかな？ エトナちゃんがちょっと困ったように眉毛を下げた。よし、ここは一気にたたみかけろっ！

「さっきも言ったでしょ？ あたし達は友達だって。だから、気にしないでいいよ。どんなに小屋がボロくて、築百年越えてそうで、シロアリにいつ食い尽くされてもおかしくなくて、夜寝て朝起きて部屋の床に空いた穴に足突っ込んで骨折とかしたり、トイレがなかったり、台風が来たら潰されそうになったり、朝起きてもそれに気付かなかくっても、別に全然気にしてないよ、あたしはっ！」

……よし、言いたいことは言い切ったぞっ！
って……アレ……？

「う……うううう……」

……エトナちゃん？ 何でそんなにあたしを憎々しそうに睨め付けやがってますか？

あたし、何か言うこと間違えたんだろか？

「うーッ！！ ふえええええーんっ！ マイさんの嘘つきーっ！間違いない気にしてるじゃないですかーっ！ あほんだらーっ！」捨て台詞を吐きながら、涙をちよちよぎらせながら、一目散に走り去る、可憐な少女エトナちゃん。

それを呆然と見つめるあたし。つか、エトナちゃんって大阪人？でも、何で……あたし、何か気に触る事言ったっけ……カチカチ……（履歴を確認する音）。

ふおっ！ 直前の台詞でエライこと口走ってるってあたしっ！自重しろっ！

ル〇ゲさんごとく記憶の履歴を呼び出して、仮想キーボードで検索、脳内で確認、慌てるあたしっ！ 端から見ると変態だっ！

ってか、そんなことより……エトナちゃんを追おうッ！
つか、このままだと『ハ〇テの〇とく！』の表紙裏のような事態に……。

それだけは……嫌ーっ（大泣）！！

心の中で何かがハジけた。分かりやすく言えば種割れ。

神経がごとく研ぎ澄まされたあたしは目が死んでるにもかかわらず超人的スピードでエトナちゃんを追いかけたのだった。

んで、次の朝。多分。暗いから分かんないけど、目が覚めたから朝だと言うことにしておこう。

昨日の夜は遅くまで加速装置を使ったかのごとくハイスピードなデッドレースを繰り広げたり、妙に大きい（全長1メートルくらいあった）コウモリと格闘したり、最終的にセブ○セン○ズに目覚めた感じがしたけど、とりあえずエトナちゃんに「ごめんなさああああいっ！」ってどこかのイマ○ンみたく謝って許して貰って（烏○所長みたく「だが私は謝らない」とか言ってみたかったけど、んな事現実にはやったら絶対にヤバイ方向に話が進むからそれは言わなかったけど……言ってみたかったなあ……）、とにかく同棲……じゃなかった同居一夜目を過ごしたのでありますよ。イベントCGに残るようなことは全く、これっぽっちもなかったけどな。けっ！

何でお風呂イベントが省略されるのよっ！ あるでしょ、今時フツーの年齢制限付き恋愛系ゲームにはっ！ 着替えてる所にばったり出くわすとか、お風呂に誰も入ってないって思ってたらずにお風呂の扉を開けちゃうとか、そういうシチュエーションくらいあっても大丈夫だとあたしは思ってたけどな、うん。そういや、トイレイベントとかもなかったような……ソ○〇〇検閲？

まー、あたしも環境の変化とかで疲れてたからエトナちゃんを襲おうとか思う暇もないうちに眠りに落ちちゃったわけで。それによく考えれば、そういったゲームでは大体一日目からそんなCGは集められないようになってるしなあ……特殊なのは除いて。

どちらかと言えば特殊な方が良かったような気もしないでもないけど、大体そういうの地雷ゲーになりやすいし、こんなくらいがちように良いんだろうか。

……何？ ホームシックにかかったりしてないのかって？ うーん、そだなー。元々、親とかとは会話がなくて、ずっとネットゲーとかパソゲーばかりしてたから、あんま、この世界に違和感ないって言うか何て言うか。まー、心残りと言えば積みゲーをクリアしてないって所かな。……捨てたりしないよね、お母さん……。いかん、そう考えたら不安になってきた。しかし、帰る手立てがないし……時空を越える電車とか走ってこないかなー？

微妙に現実逃避しながらあたしは顔を洗うため立ち上がった。そして。

ガギッ

「あだだだだだだだっ」

ものの見事に床の穴に足を突っ込んだのだった。足の骨、折れないで良かったー……。

「では、ご飯作りますねー。今日の朝は昨日の夜マイさんが徒手空拳で殺しまくったギガスコウモリの目玉焼きですう」

あー、アレの名前ギガスコウモリって言うんだー。舞、また一つお利口さん。

ウーフフフフ……似合うなあ。何がって、エトナちゃんのエプロン姿ですよ。さすがに裸エプロンではないですが。……見たかったけど。

制服の上からのエプロンってのもなかなか乙なもので、その姿はまさに朝になっても薄暗いこの小屋を中から照らすお日様そのもの。あー、デジカメ持ってたら写しておきたかったなあ。ケータイは家に忘れて来ちゃったし。ったく、あたしってば、こういうところ抜けてるんだよなあ。

ま、いいや。その代わり、エトナちゃんの一挙一動を余す所無く瞳に、そして脳裏に焼き付けておこう。

ふんふん、エトナちゃんは鼻歌じりにまな板の上に件のコウモリ

をドカッと数羽並べると、包丁をまるで、人を突き刺すみたいにとって……？

そのコウモリの瞳に一突き！　ぐちゅっといった不快な音を立てて突き刺さる包丁！

そして、程よくめり込んだ包丁を力任せに引き抜くと！　その先端には直径が五百円玉くらいのおおきさの目玉がギョロリ！

それを事も無げに素手で掴んで包丁から取り除くと、同じ方法でコウモリの目玉をくりぬいていく！　しかも速い！

もう、歌ってる鼻歌が映画リ○グのエンディングに聞こえてきてるんですけど、あたし！　あぁっもう、あの笑顔が『くけけけけけけけっ』にしか見えてこないっ！　もう、あたしはある意味空鍋級の戦慄を感じたよっ！

エトナちゃんは戦慄しているあたしに気付くことなく、両手に抱えた目玉をザルに入れると汲んできた水でサッと濯いで……そのまま釜戸のフライパンにぶちこんだっ！

ひいひいひいっ！

じゅーじゅー焼ける音が生々しいよう……。

でも、今日の朝のメニューって確か……こんなホラーじみたものじゃなかったような……。とりあえず、聞いてみた方が良いかな？　ひょっとして、昨日のことまだ根に持ってるのかも知れないし……。

「あー、えっと、エトナちゃん……」

あたしが声をかけると塩こししょうで味付けをしている手を止めて、エトナちゃんがこちらを向いてきた。顔に返り血を浴びながら。ぷぎゃあ。

「あ、はい、何ですか？　もう少しで出来そうですけど……」

返り血を浴びつつ微笑む彼女。怖いよう。あうあう……あたし、腰砕けそう。でも、勇気を出さなきゃ。でも、その前に神様に祈りを……エトナちゃんが包丁で襲いかかってきませんよーにッ！

「あ、えーと、つかぬ事を聞くけど、今日のご飯って目玉焼きだよ

ね……？」

「はい、目玉焼きですよ？」

にっこり笑ってフライパンをこちらに見せてくる。その中には幾人もの目玉親父が元氣そうに跳ね回って……断末魔をあげていた。

いや、違うでしょ、目玉焼きってのはあたしの記憶が正しければこんな戦々恐々としたものじゃないよっ！

「え？　でも、あたし言いましたよね、コウモリの目玉焼きだって」

「え、うん……？　確かに……そう言ってたけど……」

コウモリの目玉焼き？　コウモリの卵の目玉焼き？

アレ？

何かあたしちょっと間違えた解釈してた？　つーか、コウモリっ

て胎生じゃん！　卵なんかあるわけじゃないじゃんっ！　気付けよあたしっ！

そーいうことは……そーいうことは……コウモリの目玉焼き……。

あたしは心の中でその言葉を反芻していく。次第に固まっていくイメージ。それを打ち消そうという根元からの恐怖。その果てしないジレンマのループの果て、あたしは一つの結論に行き着いた。

その結論とは……

「め……目玉焼きって……読んで字のごとくメダマヤキダツタノデスネ……」

イ、イヤダ……イヤダ、ソんなゲテモノ料理、食べたくないでちゅ。

「このーギガスコウモリの目玉焼きはおいしいので有名なんですよー。あたしの地方の隠れた名産なんです。値段も高くって一つ1000ゴールドするんですよ」

引きつった笑いを浮かべるあたしを完全に無視してエトナちゃんはおこちから見ると悪魔の笑みで（多分本人は普通に笑ってるんだろーけど、返り血が怖さを倍増中）そう言ってくる。いや、この世界の貨幣価値がよく分かんないからそれが高いのかどうかがよく分かんないけど。この世界の人って、そんなもの平気で食べるの？

「ぶーっ！ そんなものなんて言わないでくださいよう。朝からこれが出るのは何かおめでたいことがある日なんですから。最高の贅沢なんですよう。残さず食べてくださいねー」

死刑宣告。

そんな満面の笑みで言われたら……あたしは食べざるを得ないじゃない！ 分かったわよっ！ 食べてやろうじゃないっ！ 皿まで喰ってやろうじゃんっ！

……あたし、胃薬持ってきてたかなあ……。

それから約15分後、満を持して登場した今日の朝のメインディッシュはあたしの前に渦高くそびえ立ったのだった。ああ……目玉親父さんたちがエライ事に……キタ〇ーが見たら卒倒するね、絶対。うう……やっぱ怖いよう。

やっぱ、食べられない……。食べる直前でさっきの決意が揺らいだ。あたしは死屍累々の目玉親父に目を合わさないようにしてエトナちゃんを盗み見た。

うっ……凄く何かを期待するような目でこちらを見てきてる。その瞳は本当にうれしそうで……あたしはここから逃げる事が出来ないことを再認識した。

眼前の目玉立ちに向き直る。

生唾ゴックン。鳥肌サァッ。冷や汗どくどく。

あたしはフォークを握った震える左手を右手で押さえつつとりあえず、見た目が一番小さい目玉に突き刺した。

そして、そのまま口の中に放り込む！ 凄く水で流し込みたいけど、それはエトナちゃんが可哀想だ。あたしは意を決するとくちゅりっと奥歯でそれを噛み潰した。

もぐもぐもぐ……もぐもぐ……もぐ？ もぐもぐ……

……アレ？ これは……

「おいしい……」

驚きの味だ。何て言うか、カレーと唐揚げと、うどんとラーメンが混じり合ったような絶妙のハーモニーが舌の上で奏でられている

っ！　って、おいしいのか？　それ！

まーとにかくっ！　人はどうかは知らないけど、あたしはおいしいと感じたのですよ、意外にも。……味覚音痴って訳じゃないよ？　マヨラーだけど。

皆さんも、一度ご賞味ください、多分気に入りますからっ！　多分。

「えへ、良かったですう、お口にあったみたいで」

エトナちゃんが安心したように笑う。

それにあたしは首を縦に振って答えると、

「うん……これ、凄くおいしいよっ！　ありがと、エトナちゃん！」

「いえ、あたし、料理だけが取り柄なもので……喜んでもらえてこちらもうれしいですう」

「いやいやそんなこと無いよ、あなた他にも良い所いっぱいあるしさ」

「えと……そう言ってもらえるとお世辞でもうれしいです」

エトナちゃんが遠慮がちに言ってくる。うーん、別にお世辞じゃないんだけどなあ……。　ま、いいか。エトナちゃんうれしそうだし。

「ま、とにかく、早く食べ終わっちゃおう？　今日も授業あるんでしょ？　あたしもあなたの先生所に行かなきゃいけないし」

「それじゃ、あたし、案内しますから。さっさとご飯食べちゃいましょっ！」

あたしたちは二人で笑い合っていると、今日の朝ご飯『ギガスコウモリの目玉焼き』を残らず平らげたのだった。

そんなわけでやって来ました、職員室。この世界にも教師のたまり場ってのはあるらしい。エトナちゃんに送ってもらって順当に到着。彼女は授業に行っちゃったけど、ま、こればかりは仕方ないさね。そこまで拘束出来ないし、エトナちゃんを応援するって決め

たわけだし。とにかくエトナちゃんにはとっとオ○リスレ○ド状態を抜け出して貰いたい。オベ○スク○ルーレベルとまではいなくても、せめてラー○エ○ーレベルになってくれたら……あたしの怪我也減るかもだし。今日の朝だけで、何度床の穴に足をつっ込んだことか。足傷だらけだよ。あたしの美脚に傷が残るのは避けたいし、これ以上痛い思いはしたくないしねー。あたしのためにがんばれ、エトナちゃん。

ま、愚痴はこれくらいにしてあたしはあたしの出来ることを始めるとしますか。

制服の襟を正して身だしなみを確かめる。とりあえず、外面くらいはまともにしとかなないと。昨日はこのまま寝てしまったし、シワついてなかったよね？ 首を後ろにクルリと回して確かめる。うん、大丈夫そうだ、よかった。これ以外は使用済みの体操着しか持っていないから制服がアウトだとそれを着ていく羽目になってただけ……さすがに使用済みの汗くさい体操服を再び着るということはいたくない。と、言うか、そんなマニアックなプレイはしたくないってのっ！ あたしの芳醇なフェロモンにつられて変な輩が寄ってきたらどう対処すりゃいいんだか。可愛い女の子ならだいかんげーだけども、小汚いおっさんだったら有無を言わず殺して良いよね。この世界のルールがどうなってるかは知らんけど。ま、自分の貞操を守ることはどこの世界でも唯一無二の絶対正義なのでありますよ、これあたしの持論。ま、あっちから捧げるのは別に構わないけどねー。つーか、あたしに捧げろ、美少女。

よし、それでは身だしなみもチェックしたし、とりあえず年増とか親父が多そうな職員室に入るとしますか。

あたしはノックをするため軽く丸めた左手を胸の高さまで持ってきて、そこではた、と手を止めた。そして、ここでまじまじと職員室の扉を眺めてみる。

へえ、何て言うか立派な木の扉だなあ。多分素材は質の良い檜。さすが先公クラスのたまり場。フツーの教室とは一線を画す上等な

造りだ。どうやらここがどっかの社長が造ったデュエル学校張りの実力至上主義ってのは間違いないらしいなあ。けっ……成金ブルジュアジーム。魔術とかそんなモノ極めようが一世紀も経たないうちに新しい技術が台頭してきて歴史の影に埋もれていくのに今だけ天下取ったつもりですか、哀れな人間どもめ。ま、あたしはその下でしかないバイトをしなきゃならない身なんですけどね……世の中って無情だなあ。こうがっばりと稼ぐ事って出来ないのかしら。

「あの……さ、フラノさん？」

あたしの世界じゃ、株やって儲けるのが一番良いんだろうか？
いや、それよりも今流行りのセカ〇ドラ〇フ？　アレ、ネットゲーっぽいし、一度やってみたかったのよねー。

「おーい、マイにゃん……」

それ以外には起業がブームとか言われてるけど、ちゃんとした知識もないのに始めるのは自殺行為にしかならないのは明白だし。一部の成功した人間を見ただけで自分も出来るって思う愚か者の多いこと多いこと。大体成功者ってのは失敗した奴の屍を乗り越えて来てるんだから、ぽっと出の人間になんか成功出来るはずがないと気付けばいいのに……。

「マイにゃーん、あたしの声届いてる？」

「まー、こんな時代遅れの世界でそんなこと出来るとはこれっぽっちも思っただけだねー。エトナちゃんから聞いたけど、この学校って助手となった場合はその教授のポケットマネーから支給されるらしいし……。ま、こちららは堅実に安時給のバイトで生計を立てていくとしますか。あんな女教師の月給から出るバイト代なんてたかが知れてるけど。適当に気を抜いてやればいいや」

「ほーう？　マイにゃんってそんな考えで労働に勤しむ気だったんだ」

「へ？」

あたしのすぐ背後から聞こえてくる、こ……この声は……。
本能的に振り向きたくないという首を軋ませながら振り返る。冷

や汗を手にじっとりとかきながら。もう顔の筋肉が凝り固まってるのが自分でも分かりまくってるくらい動揺してるんだけど。

視線を合わす。そこには白衣を着た女性が満面の笑みで立っていた。

あたしは、この女を知っている。エトナちゃんの担任だ。ひよつとして、あたしの発言、聞かれてましたか!?

「あ……あはは……せ、先生……おはようございます」

あたしは引きつった笑いを浮かべつつ、先生に朝の挨拶をする。もちろん腰を曲げる角度は九十度で!

先生は満面の笑みを崩さず、

「うん、おはよう」

その笑顔に薄ら寒いモノを感じるけど、ここはなけなしの勇気を出して、会話を続けよう。

「あ……あの、今日からよ……よろしくお願いします」

「うふふ……今日からよろしくね。でもマイにゃん感心するねえ、あたしから呼びに行こうと思ってたんだけど、そっちから来てくれるなんて」

「あ、いえ……」

アレ? ひよつとして怒ってないのかな? 先生……。

ちよつとした期待を込めてあたしは上目遣いで先生の顔を覗き込む。

「で・も! これから大変ねえ……こんな安月給の教師の下で肉体を酷使させられるんだから」

「あ……う……ひよつとしてと、いうかやっぱり先生……怒ってます?」

「うっふふ、べっつにいゝ怒ってなんかいないけどお」

変わらぬ笑みで、先生は言ってくる。しかし、その声には鈍感なあたしでも分かるくらい怒りの念が籠もっていた。

「声に怒りの念をビシビシ感じますが……」

「だから、別に怒ってないわよ? ただあたしの安・月・給の中か

ら血のにじむ思いでバイト代を出してあげようって思ってたんだけどねえ。あなた達の世界の通貨単位で時給五千円」

「うなっ！」

あたしは思わず驚愕の叫び声を上げた。そ、それはかなり割の良いバイトなのではあるまいか！？ ひよっとして、先生ってお金持ちなのでありますか！？ 一日五時間働くとしてえーと、日曜だけ休みとして、月ろくじゅうごまんえん！！ その半分としても三十万円以上じゃないっ！ フツの初任給より多いよっ！

「あ……あはは……」

こりゃ、凄いパラダイスなんでね？

い、いかん、知らずに笑みが湧いてくる……それだけお金があれば、あの小屋を修復してもお釣りがくるようっ！ えへへ……あたしってば人生の成功者だねえ！ そんなことならこの先生に一生ついてっても良いなっ！ あっはははははは……

「でも、何かマイにゃん、安月給で働きたいらしい……時給は二百五十円で良いわよね？」

………は？

「どうしたの？ そんな鳩が豆鉄砲喰らった顔しちゃって？ まー、あたしとしては安月給って思われるのは別に構わなかったんだけどねえ……気を抜いて働こうって考えで働いて貰うと困るのよ？ だから、ちよっとしたお仕置き」

お……お仕置きって……何でそれだけのことであたしの時給が五千円から二百五十円に大幅削減なのよっ！ しかも、時給二百五十円ってどこのゴーストスイーパーの助手の給料設定デイスカッ！

「あっれ〜？ その顔はなにな〜？ もしかして不服なの？ だったら、あたしの助手のバイト辞めて、どこか別の所で働く？」

唇に人差し指を当て、いたずらっ子みたいな笑顔を浮かべながら先生が言ってくる。出来ればそうしたいよ。誰が悲しくてそんな労働基準法に違反したような賃金で働かなきゃならないのよっ！

「へー………だったら紹介してあげても良いけど……。あたしの知り

合いの大人のお店で肉体奉仕。上手くやれば夜の女帝になれるけど」
「助手させてくださいっ!」

あたしは即答した。

あたしは一人廊下を歩いていく。とりあえずあの先生に仕事を仰せ付かったのだ。……そういや、先生の名前って何だっけ？ これからも何回かは登場しそうなのに、さすがに名前無しってのはマズくないか、作者よ。

「それはともかくとして……」

任された仕事が倉庫の整理とは。ベタといえばベタなんだけども……女一人にさせる仕事かよ。ま、体力には自信あるから良いけどさ。めんどくっさいな……でも、手を抜くわけにはいかないし……ま、それには相応の理由があるわけで……。

その理由ってのは、早い話バイト料の増額。真面目にやるって分かったら、仕事量に応じてアップしてくれるって事だけど……時給五千円に戻る日はいつなんだろうなあ。……自業自得だったから仕方なくこの条件飲んだけどさー。あー……やる前から気が重い。

そんなこんな考えている間にあたしの前に周りとは雰囲気が違う鉄の扉が現れた。

「えーと……」

とりあえず先生の書いてくれた地図を確認。字は読めないけど、雰囲気で何とか理解する。あたしは『答えを出す者（ア○サー○カー）』じゃないしね。つーか、この、扉を指差してる絵は何のつもりなのだろーか？ ポル○○フか？ 亀だし。

「ま、それは良いとして……ちやっちゃつとやってしまえますか、展開も野暮ったいし」

なんとなく、この物語に対して身も蓋もない事言ってる気もするけど、マジで展開がウザいのでこら辺で超展開とか望むのが当たり前ということになるんだけど……。

まー、こっちとしてはこの扉が異界に通じてたりとかしたら「エー！ マジ、ナ〇〇アのパクリ!?」「キモーイ」「扉の先が異世界が許されるのはナ〇〇アまでだよー」とか言うと思うけど。

えーと、そういう危ない発言はこっちに置いとくとして、とりあえず、中に入るべ。

その扉の取っ手に付けてある南京錠っぽいモノを確認すると、ポケットをまさぐって鍵を取り出す。ここに来る前に先生に渡されたモノだ。なんでもこれ自体に魔術が施されているらしく、先生が管理している倉庫や物置に入る時には、いわばマスターキー的な役割を持つ代物らしい。つまりこれ一つで先生の管理物件全ての鍵を開けられるし鍵も掛けられるって事。ま、理屈的には結果がどうのこのうって言ってたけど、あたしにはそっちの知識は無いのだよ。

その鍵を鍵穴に差し込むと、カチャンッと軽く捻る。

と、同時に扉が鈍く一瞬光る。これが結界を解除したって事なんだろうか。

首を捻るが、答えが分かるわけではないし。とりあえず、あたしは解錠された南京錠を外すと、恐る恐る鉄の扉の取っ手を捻った。……良かった電撃とかは仕掛けられてないや。

ギギギッと錆び付いた音を立てて開く扉。その先を覗き込むと、案の定、異世界などに通じてるわけもなく、何か分からない物体が大量かつ乱雑に置いてあるだけだった。

「って!」

あたしは思わず顔を引きつらせ、半眼になった。……量が多すぎるってばよっ。

「これを今日一日で片付けろってか? こっちはか弱い女の子なんだけど……」

そこ、1メートルを超えるコウモリ達（確か二十匹）と徒手空拳で戦って勝つ女のどこが弱いんだと言わないッ!

でも、フツーの奴だったら不満たらた言うって。この倉庫、外から見ると遙かに大きい。その上天井も高い。多分4メートル以

上ある。そこに所狭しと並べられた大小様々な物体の数々。ド○キ○ーテより、品数多いんではなかるーか。

「うっへー目眩してくるよ、こりゃ……あたし、少し閉所恐怖症の気があるし……」

逃げてやろーか。

軽く頭を抱えるが、その時、あたしの胸に去来したのはエトナちゃんの頑張っているであろう姿。何言われても頑張ってる彼女の姿。……。

ああ……可愛い。ハアハア……

「うん、そうだよ。エトナちゃんも頑張ってるんだし、あたしも逃げないで頑張るか。よしっ」

頬を手で叩いて気合いを入れる。口から垂れた唾を拭しつつ、軍手を嵌める。

そうね……まずは、この壁に立てかけてあるあたしの身長くらいの長さで、布でぐるぐる巻き付けてある……何だろ、これ。何か、妙に惹かれるモノが……。

何故か高鳴る胸の音を聞きながら、そっとそれに左手を伸ばす。

と……

バチッ

「あうっ!!」

あたしの手とその間に青い火花が散った。尻餅をつく。まるでライデン瓶に貯めた静電気を一気に解放したような強い電流。……死んではないから、そこまでは酷くないけど、左腕の感覚がほとんど無くなっちゃった。痺れて動かない。時間経ったら回復するかな？

いや、今はそれよりも……。

あたしは完全に痺れている左腕を庇いつつ、強い電撃を放ったそれを見つめた。立とうと思うけど、足に力が入らない。どうやら、全身に痺れが回ってるらしい。左腕ほどじゃないけど。それだけ強い電撃だったのか。あれ？　そういや、確か人間って身体に強い電流流したら、筋肉が弛緩しちゃうんじゃないかな？　と、言う

ことは……。慌てて、何とか動く右手でお尻の方を触ってみる。：良かった、漏れてない……。

ホッと胸をなで下ろす。さすがにこんな年端もいかない女の子がえーと、何って言ったら当たり障り無い？　さすがに直球で表すとマズイ感じするじゃん、さすがに。まー、とりあえず、平たく言えばですね、漏らさなくて良かったなって事ッすよ。それ以上は突っ込まないでくれるとありがたいです。

ッて、今はそれよりもっ！！

ああ、何で話が脱線するのかな？　これだと無意味に文字数を浪費して、後で削ることになっちゃうよってそんな内輪ネタはどうでもいいっ！　とにかく今すべき事は、目の前に鎮座している物体についての考察だろ、あたしっ！　漏れてなかったんだし。

「……で、ホントにこれ何なんだろうな……」

とりあえず、命に別状はなかったとはいえ、これの他にもそんなモノがあったら、今度は命捕^{たま}られるかも知れないし、そんなことより、作業自体がおぼつかなくなる。それじゃ、仕事遅れるし第一時給アップなんてしてくれるわけないじゃん。くそー。

しかし、先生も先生だよねえ。こんな危険なモノがあるんだったら、先に言っとけての。そしたら、あたしも不注意にこんなモンに触ったりしないってのに……。ん、足の痺れはとれたか。何とか立てるかな？

「よつと……」

立ってから、その場で二三度跳ねてみる。少し違和感が残るけど、大丈夫だ。次は右手。閉じたり開いたりを繰り返す。……。うん、左腕以外は感覚が戻ってる。これなら、片手で運べるモノは整理出来るかな。利き腕じゃないけど、何とかなるでしょ。時間も勿体ないことだし。

それじゃとにかく始めますか。……。安全そうなのから片づけるようにしよつと。

作業を初めて数十分。その頃には左腕もだいぶ回復し、結構大きな荷物も持ち運べるようになっていた。

うん、最初は面倒臭いって思ったけど、やっぱり身体動かす仕事って楽しいな。あたし、デスクワークとか接客って昔っから苦手だし。こういう仕事は好きなんだけど。

鼻歌を交えながらさくさくと仕事をこなす。ま、やってることは荷物をどかして、床を掃いたり、水ぶきしたりするくらいなんだけど。

「ふふふーんふ、ふふふーんふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふっふーん」

「お〇とー」

………ン？ ……今なんか変な声が聞こえたような。慌てて辺りを見回してみるが、やっぱり誰もいない。あたしの気のせいかな？ 首をかしげて作業に戻る。ま、そんなこと考えてるより仕事仕事。生きるために一番必要なのは何はなくともお金なのです。これは絶対の理。友達や恋人よりもお金さえ持っていればハピネス。この世の欲望を全て満たしてくれるのはお金だけなのです、ホント。

そんなわけで、労働リスタート。楽しんで儲けられたらそれに越したこと無いけど、大体そんなのどっかで他人を不幸にしていること間違いないし、あたしや他人が自分のせいで不幸になる事大っ嫌いだし。だから、真面目に労働するのを選んでる。そりゃ、選ぶ時には少しでも稼ぎが多くなるようにはしてるけどね。それくらいは罪にはならないでしょ。

よし、また気分乗ってきたし、今巷で大流行、Mステにランキングが入って驚いた、あの歌を鼻歌で歌うかつ！ ちなみにあたし達の世界で鼻歌歌うとJ〇S〇〇Cに著作権侵害で訴えられちゃうけど、ここ、異世界だし、そんなことかんけーないよねん。

では。

「ふーんふんふんふん、ふん、ふふっふふんふっ、ふん、ふんふーんふんふ、ふん、ふんっふふふん」

「ぷっ！」

……って、やっぱ何か聞こえたっ！ しかも、なにげに歌詞合ってるし、さっきのも今のもっ！ ちなみに歌のタイトルは言っ
てはダメな気が物凄くするので、各自で判断してください。いや、
そんなことより……。

「誰かいるの？ いや……いるわよね、二回とも聞こえたし」

周りを見渡す。今度は念入りに、ゆっくりと、二回。

でも誰もいない。鉄の扉はしっかりと閉じられ誰かが中に入っ
てきた痕跡はない。いや、それ以前にあの扉は錆びてるから、入る時
音がして、すぐに何者かの侵入を察知するとは出来るはずだ。と、
いうことはあたしがここに入った時、もしくはその前からこの倉庫
の中にいた。そう考えるのが筋だろう。でも、ここって先生の魔術
で誰も入れないようにしてたんだよね、確か。それに、今まで掃
除してて、埃が変に落ちた所や、その上を歩いたような足跡なんか
一つも見なかったし。

「ふむ……」

こんな時、見た目は子供頭脳は大人な探偵がいたらすぐにこの声
の主を三十分以内に見つけてしまうのだろうけど……。

「あたしはどっちかって言うて見た目は大人頭脳は子供の」

「迷探偵コエーダ」

「そうそう、ナイトスクープでだいぶ前そんなネタやってたよね……
って！」

誰だ、異世界でそんなマニアックなネタを知ってる奴はっ！ 声
のした方を思い切り振り返る。今度ははっきり聞こえた。若い男の
声！

「って、やっぱ誰も……あ……」

確かに誰もいない。でもあたしの視線はそれを捉えていた。それ
はあたしが今まで気にはなっていたけど、一度触れただけでやめた
モノ。そう、あたしの身長くらいの長さで布でぐるぐるに巻き付け
られたモノ。太さはそんなに無いから、棒みたいなのだと思うん

だけど……。

まさか、それが喋ったとか？

「その通りだぜ、適正者」

うおっ、マジでしゃべりやがった。ちょっとびっくり。へー、異世界って布が喋るんだ。アニメとかではよくあるけど、現実でもそうなのね。……でも、何だろ、この声誰かに似てるなあ……。

「いや、布がって……その中身が喋ってるって普通思わないか？」

「いや、あたしあんたの中身なんか知らないし。布が喋ってるって思ってもいいんじゃない？　つーか、あんた中身あるんだ」

「あるに決まってるだろーがっ！　無かったらここまで引っ張ったのが悲しくて仕方ないわっ！　……まあいい、俺のカッコイイ姿見せてやるからよく見とけ。適正者」

言うのが早いか、布の内側が稲光のような閃光を放った。同時に宙に浮くと、それに巻かれていた布がまるで風になびくように解かれていく。

「……………」

思わずその様子に魅入ってしまう。何て言うんだろう、こういうの。神秘的で、それでいて、禍々しいというか。

その光景を見ている間、まるで周囲の時間が止まったようだった。閃光が収まる。ひらひらと宙を舞う布をバックにそれはあたしの目の前に等加速度運動的に勢いをつけて落下してきた。

ごすっ

「ひょえっ」

慌てて身を引く。あぶなっ！　ちょっと退くのが遅かったら足にぶち当たってたよ……。良かった……足壊されなくて……。

今ので冷静な頭に戻ったあたしは、落ちてきたそれをマジマジと見てやる。なるほど、これがあの布の中身だったのか。

「どうだ、見惚れるほど美しいだろ？」

「いや、あんたが勢いつけて落ちてきたせいでキモ冷やしたからそんな気持ち一つも浮かんでこなかったよ。つーか、ある意味ベタっ

っーかお約束っーか。喋る剣ね……」

「おいっ！ それ言うなよ、身も蓋もないだろがっ！ こっちだっ
て気にしてんだよっ！」

そう。あたしの目の前に落ちてきたモノ。それは鏢の部分に口を
大きく開けた龍というか、ドラゴン……いや、それに似た何か別の
生物の顔面を象ったデザインの西洋風両手剣。かなり大型で、さっ
きも言ったようにあたしの身長くらいの長さがある。

「なるほど、あんた名前はゲキ○ユウ○ンね？」

デザインなんか似てるし。

「違うわっ！ この世界に伏せ字で呼ばれなきゃならない剣があ
るんだよっ！」

「あんたがその世界初に」

「なりたくねーよっ！」

「じゃモモ○○ス」

「何でッ！」

「声が中の人ソックリ」

今さっき思い出したりして。

「中の人言うな！！ ただ単に似てるだけだっ！ それに伏せ字で
呼ぶなってさっきから言ってるだろーがっ！」

「ま、イージャンイージャンスゲージャン」

「てめえ……全く反省してねえな……」

剣はやれやれといった様子でため息をついた。その様子がいかに
も人間らしい。顔は無いけど、その表情が手に取るように分かる。

ま、男の表情が分かって、こっちはうれしくも何ともないんで
すけどねー。

「ま、とりあえず適正者。これから一緒に暮らしていく仲だ。名前
くらいは名乗っておこう。俺は聖魔剣『レヴァンティバー』だ。適
正者、お前の名前は？」

「え？ ああ、富良野舞だけど」

つられて答えてしまう。ま、名乗られたし仕方ないか。しかしレ

ヴァンティバーか……憶えやすいような憶えにくいような……後であだ名でも考えとくか。やっぱ声からしてモモ○○スが良いと思うんだけどなあ……。

「富良野舞……か。その名前からすると、お前……異世界から呼ばれちゃったのか？」

おっと、知らないうちに会話が次の段階へ。お、漢字で呼ばれたのはこっちの世界に来て初めてだ。それに、何か言いにくそうに聞てきたけど……何でだろ……いや、それよりも……

「いや、それはさっきの会話で気付こうよ。どう考えてもこの世界の言語じゃないでしょ、ナイトスクープに迷探偵コエーダって……つか、何であんた、あたしの世界のこと知ってるのよ、剣のくせに」
「剣のくせに……のは余計だが……その件については、俺には特殊能力があつてな」

「特殊能力？」

お、何かワクワクする響きだなあ……。

「おう、これから行動を共にすることになるお前には特別に教えてやろう。実は俺にはな」

「ふんふん……」

何となく興味津々になって耳を剣に近付けてみる。

「この世界を始めとする全ての平行世界の情報を好きだけ手に入る事が出来る能力が備わっているんだ」

「へえ……」

何だ、そんなことか。

「何だよ、その気の抜けた声はっ！ もっとう「あ、だからあたしの世界の世界の言葉を知っていたのねっ」とか「だから、あたしの名前を漢字で復唱出来たのね、このお利口さん」とか気の利いたこと言えねえのかっ？」

「エー……キモイ」

「キモイって言うなっ！ 傷つくだろがッ」

「いや、実際キモイし。でも、とりあえずあたしの世界のことをか

なりディープな部分まで理解してることは分かった。じゃ、その幅広い知識を持ったあんたにいくつか質問」

ピッと指を立てて聞く。

「お、何だよ、そんな真剣な顔して」

「いいから。まず、一つ目。攻め」

「受け」

「×（かける）」

「前と後ろが逆なだけで戦争発生」

「有明」

「夏と冬の壮大イベント」

「波紋疾走」

「オーバードライブ」

「この世の中で最もおかしな効果音は？」

「メメタア」

「OK。あんたとは良い友達になれそうだわ」

「いや、そんな何かを達成した顔されても困るけどよ……」

「それじゃ最後に……この質問で締めくくるけど、いい？」

「おう」

そしてあたしは最後を締めくくるに相応しい質問をするのだった。

「付いてる娘と付いてない娘、どっちが好み？ あたしはちなみに

……付いてる方が良いんだけど……」

倉庫を出た廊下にて……。

「はあうあ……まだ痛いんだけど……」

頭をさすりながら悪態をついておく。もちろん、涙にふくれっ面は忘れずに。うーくそ、ホントにたんこぶ出来てるし……。

「頭悪くなったらどうしてくれるのよ！ あんた」

あたしは両腕に挟んで支えている剣『レヴァンティバー』に向かって抗議する。

しかし、こいつとしたら素知らぬ口調で、

「大丈夫だ、もうそれ以上悪くなることはねえ」

「それどういう意味よ」

「いや、それどころか相棒になるかもしれない適正者の変態性癖が治るもしれないんだ。それなら喜んで俺は鬼となろう」

「鬼になるって……そりゃあんたがああの変態性癖の後いきなり刀身をねじ曲げてあたしの頭をぶっ叩いたときは目ん玉飛び出るほど驚いたけどさ……つか、変態性癖って何よ」

「いくら何でも女がああの変態性癖はまずいんじゃないか？」

「えー？　だってただ単に同性同士でするよりは生産性があると思うんだけど」

みんなもそう思うよね？　ね？　ちなみに生産性ってのは想像通りのことですよ？

「生産性って……そりゃあるだろうけどよ……」

「そんなことより、あたしの質問、そんなに変だったの？」

「それ以前に言ってくるお前の顔が怖かったんだが。今回はそれで済ますが、今度もし荒い鼻息をあげながらイツちゃってる目でそんな事言った日には……」

「日には？」

「……聞きたいか？」

びくうっ！！　その台詞を聞いた瞬間何か背中に悪寒が走りましたよっ？　こ……これは……生命の危機っ！？

「き……聞きたくないです……」

「ふ……そうか残念だ」

……全然残念に思ってたねーな、こんちくしょーっ。ひょっとしてこいつ、そんなお仕置きをいつか披露してやろうと虎視眈々と狙ってやがるんじゃないでしょうね……。あれ、でも何か、あたし……少し楽しみ？

「何か言ったか？」

「ううん別に」

ブンブンと首を振って誤魔化す。何となく自分の知らない面に出逢えたような……いや、出逢いたくはなかったけど！

「ところでよ」

「はい！？」

何となく深く追求すると危ない自分に気付いてしまいそうなその瞬間に声を掛けられ驚いてしまう。ま、そのおかげで気持ちが切り替えられたけど……。

「どうした？ 何か焦ってるみたいだが」

「な、何でもないからっ！ で、何の用？」

「いや、さっきからどこに向かっているのかなあとか思ってたよ。掃除は良いのか？」

「ああ、その事？ あんたのこと先に先生に聞きにしようと思ってそんなわけでズルズルと重いあんたを引きずってのろのろと廊下を歩いてんだけどねえーっ。

「あー、その先公にか。別にその必要ねーんじゃねーか？」
根底からあたしの努力を踏みにじりますか、あんたはっ。

「仕方がないでしょ、あたしにゃあんたに関する情報が少なすぎるし……さっきの電撃のことも気になるしね」

「さっきの電撃？ ああ、あれの事か。アレはただ単に舞が俺の適正者足るか見定めるための選定試験みたいなモンだったんだけどな」

「選定試験って……何よ、それ」

「ん？ 簡単に言ってしまうえば俺に対する適正因子を持っていて、なおかつ俺と契約出来る者を選び出す儀式みたいなモンだ。そのどちらかが欠けていてもこの儀式はパス出来ない。ま、お前はその儀式を見事通過し、俺の相棒になる権利を得たわけだ」

「もし……それを出来なかったらどうなったのよ？」

「ああ、あの電撃で死ぬぞ」

「さらっと危険なことを言うなっ！ じゃ何か？ 一歩間違えてたらあたしはお陀仏だったの？」

「ま、助かったからイージャン」

「うっわ、何てテキトーな……まあいいや、助かったからよしとしよう……」

結構シヨック大きいけど。なんつー危険な選定方法だ……（汗）。

「……それより適正者って？ 何か特典あるわけ？」

ま、助かったわけだし、そんなことよりもさっきから何度もそう呼ばれている『適正者』という言葉の方が気になってきた。何かおいしい特典とかあるのかな？

「えーと……まず、俺と契約する権利を得る」

「うん、他には？」

「俺と契約する権利を得る」

「他には？」

「俺と契約する権利を得る、以上だ」

「へー。合計三つも特典があるんだーおっ得ー………とか言うと思っただか、この重量剣がああッ……！」

刀身を両手で挟んでその間に膝蹴りを加える。ほーっほっほっほ……ド○○アさん、ザ○○ンさんこの手の輩はこうしてあげるのが一番良いんですよ？

「あ、ゴメン、マジゴメン！！ 刀身折れる折れる折れる、折れるからっ！！ やーめーてー」

ほっほっほ……あたしの戦闘力は五十三万です。身の程を持つて知るが良い。

がんがながんがんかずんどがぶしゅぼぎっ……

ぶしゅぼぎっ？

「……………」

変な擬音に首をかしげて、見るとあたしの膝が何かエライ事になってますよ？ @/saxd;ds;a!!!!!! （痛みのみあまり言

葉にならない悲鳴を上げる）

血がぴゅーって出て、紫色に腫れ上がって膝の形が変わっちゃってるううッ！！ そこから見えてるのは骨？ あたしの骨？ あひゃあひあやっぬぬ！！

痛みに耐えかねレヴァンティバーを放り投げると、あたしは左膝を押さえたまま廊下に倒れ込んだ。そのまま意味も分からずのたうち回る。だってそうでもしないと気が狂いそうに痛いんだもん。

「あ……あひいいいい」

「おーい……真剣の刀身に膝蹴り食らわすっていう行為自体が自業自得だが、とりあえず大丈夫かー？」

レヴァンティバーが何か言ってるけど、あたしにそれを認識する余裕なんて、もうこれっぽっちもありはしないのよっ！　っーか、このままだとマジヤバイ……血が無くなって意識が薄れてきた……。ああ……あそこに見えるのは光るトンネル？　そこを抜けるとお花畑？

あひゃひゃひゃひゃひゃ……何か気持ちいい……。。

そこであたしの意識は暗い水の中に沈むように消失していったのだった。

……あー……こんなアホな死に方したくなかったなあ……。。

「タッ……タ○ちゃんが首無し死体を食べているっ！」

こうバリバリつとせんべいを噛み砕くように首の付け根から……って……。

「およ……ここは……」

消毒液の臭い、見覚えのある壁にこれまた見覚えのある器具の配置。ここは……。

「保健室だ」

「保健室よ」

あたしが結論を出す前に聞き覚えのある声二つに同じ方向から同時に答えを言われた。まあ、つまりあたしは保健室のベッドに寝かされていたのだ。あれ、何であたし、こんなところで寝てんだろ？　ま、いいか。それはともかくとして……あたしは、声のした方向振り向いて抗議の視線を送っておく。そこまであたしの台詞を取りた

いか、お前ら。

「なにジト目でこっちを睨んでんだよ？ 別にお前の台詞を取った所でたった三文字じゃねーか」

男の方の声の主、レヴァンティバーが軽薄そうに文句を言うてる。もう、確かに三文字だけどさー、あたしにしてみりゃ貴重な三文字な訳ですよ。たとえ地の文まで担当している主人公でもね。それを分かって欲しいのですよ。

「で？ 大丈夫かしら、左膝は」

これはもう一人の女の人の声。この声も知っている人、エトナちゃん先生の声だ。しかし、この人どこでも現れるな、名前公表されてない割に。あ、そうか、扱いやすいキャラなんだ、この人……少し可哀想ですなあ。

「な……何よニヤニヤ笑ってきて……気持ち悪いわね」

「あ、いえ、別に何でもないですけど……先生は何でここに？ 授業とか無いんですか？」

先生はそう聞くあたしをなぞるように眺めてから、視線をレヴァンティバーに移した。

あたしの質問には答える気はないらしい。まったく……先生はあたしよりその剣の方が大事ですか、そうですか。ま、レヴァンティバーは先生の所有物だし、何話そうが、別に良いんだけど……。少し気になるな、あの二人の会話って。よし、ちょっと聞き耳を立ててみるか。

レヴァンティバーに先生が口を開いた。思わせぶりな笑顔を添えて。

「……あの様子なら、三十分足らずで左膝はもう治っちゃったか。さすが、あなたの適正者。回復力が凄まじく高い……いえ、適正者となったことでそれが向上したのかしら？」

「確かに俺には粉々になっても再生する高い自己再生能力が備わってるがな。それがあいつが適正者になったことでその力が流入してるのかもしれないが……」

「どうしたのよ、何か齒切れ悪いわね」

「こんなケースは俺も初めてなんだよ……契約後ならまだしも、適正者になっただけで桁外れの再生力を持つようになるのはな。……俺の考えだけど、こいつ、下手すりゃとんでもない奴かもしれないぜ？」

「ま、そうであって欲しいわね。いえ、そうじゃなきゃ、ここまでお膳立てをしたあたしの立場が無いわ、そうでしょ？」

「違いねえ」

？ 二人とも、何の話をしてんのかな？ ちょっと小声で聞き取りづらいんだけど……。ま、別に取り立てて気にする必要ないか。大事なことだったらあたしに直接言うだろし。それより膝がどうのって言ってたような……？

あ。

思い出した！

慌てて布団をめくって左膝を凝視する。そこには我ながら惚れ惚れするくらいきれいなおみ足が鎮座していた。あ……アレ？ さっきのえげつない惨状は一体どこへ？ 血と肉がミンチ風味にだんしんぐとうないとした感じだったんだけど……そんなのが嘘みたいに治ってるよ？ ふーむ……不思議なこともあるもんだ……あ、いや、先生が居るって事は、先生が治してくれたのかな？ ここ、魔法使える世界だし、あんな傷くらい簡単に治せるような術とかあるのかもしれない。それなら一応お礼言っとくべきね。

「あ、先生、ありがとうございます……何か膝治してくれたみたいで」

「えっ？」

先生が少し驚いた様子で声をあげた。

「えって、膝ですよ、膝。あんな酷い怪我だったのに、完全に跡形無く治ってるなんて、この世界の治癒魔法ですか？ 凄いですよね。ひょっとして呪文はぴるぴるぴるぴーとか？」

「……………」

先生は一瞬呆けたように静止してから、

「……ええ、凄いでしょ？　でも、治癒『魔法』じゃなくて治癒『魔術』よ」

にっこりと笑ってそう言ってきた。

「？　何か違うんですか？」

「ええ……あ、そうか、マイにゃんは異世界人だし、そういったことは知らないか。それならちょうど良い機会だし、この世界での魔法と魔術の違いについて教えてあげよう。それと、この世界についてもね」

「ハア……」

えと……何て言うかマジどうでもいいんですけど、でも、何か先生張り切ってるっぽいし……断るのはマズイか……仕方ない、聞くとするかぁ。

先生は保健室に備え付けてある黒板を引っ張ってくると、白チョークで文字と絵を書き始める。つか、先生、あたしこの世界の文字読めねっす。うん、この世界が『ルーイエ』とかいう変な名前してるってのは分かったけど。ってアルェー！？

「先生……あたし、あたさが　ヘンになっちゃったよお……」

「お前はどこのゆめわかだ」

レヴァンティバーが呆れた声で突っ込んでくる。

それはあっさり無視するとして。

「嘘……何で、字、読めてんの……？」

驚いた。さっきまでは全く読めてなかったのに……今では、日本語みたやすくすらすらと読める。何々、ひょっとしてあたし一度死にかけて目覚めちゃったとか？　『アンサー・〇ー〇ー』に。……あたしこのネタ好きだなあ（汗）……そんなことあるわけ無いじゃん。でも、それはともかくして、読めてるのは事実。

何ですか？　とりあえず、先生おせーてプリーズ！

「こ、これはどういう……あたしさっきまでこの世界の文字なんて逆立ちしたって読めてなかったんですよ！？　それが何で……」

「それは、俺の適正者となった事で、お前にこの世界の基礎的な生活知識が入り込んだためだ。多分」

と、先生の代わりに答えるレヴァンティバー。それは良いとして……。

「多分って……」

えらく適当なことを言うのね。

「仕方ねーだろっ！ 俺の適正者になった異世界人ってのはお前が初めてなんだ！！ こっちも分んねーんだから、推測で物言うしかなーだろっ！！」

「ごもつともッすね……」

そりゃそうだ。レヴァンティバーもそのことで驚いてたっけ……。

「でも、この世界の文字が理解出来るようになったってのは偶然の産物でもこっちにしたらありがたいよ。一から違う国の言語を覚えるのって大変だし。あたし、英語の成績マジにヤバイからさ」

「どのくらい？」

「……偏差値……33」

「ああ……それは……」

うう……先生とレヴァンティバーが哀れみの声と視線を向けてくる……。べっ別に良いじゃないっ！ 英語の成績が悪くったって……これでも理系の方は成績良いんだからっ！ 日本人は日本語だけを完璧に操れてればいいのよっ！ それも怪しいけどね……。うう……言ってて悲しくなってきた……。

「あらら……どうしたのマイにゃん？ 泣かないで」

「そ、そうだぞ、人生は勉強だけじゃねーし。出来なくても何とかなるって！」

「レヴァンティバー……それあらゆる世界から知識を取り込んでるあんたが言うのと嫌みにしか聞こえないって分かってる？」

レヴァンティバーを持ち上げ、睨み付けてやる。フン、あたしの呪視線で悶え苦しむが良い。なんと言っても毎日この視線で見つめていたウチの金魚が亡くなるくらい凄いのだよ。……お前、いつ

も何やってるんだとか突っ込んだら、今夜はその人の枕元にあたしの呪視線が送られます、はい。

「うお……そんな人を呪い殺すような目で見てくるなっ！ 寿命が縮むツちゅーにっ！」

「いやー、あなたには寿命なんて無いんじゃないかなー……」

冷静にツツコミを入れる先生。

しかし、その次の瞬間には真面目な顔に戻り、パンパンと手を打ち鳴らした。

「ま、それは良いとして、解説にちゃっちゃと行きたいんだけど。二人とも……特にマイにゃんはしっかり聞いてくれるとうれしいんだけど」

「あ、はい、すみません」

あたし達二人は同時に謝ると、先生と黒板の前に向き直って座った（もちろん、レヴァンティバーはあたしの横に立て掛ける形だけど）。

先生はそんなあたし達の様子に苦笑するように微笑むと、チョークを持ちつつ話しを開始した。

「それじゃまず、さっきマイにゃんが不思議がってたこの世界での魔術と魔法の定義の違いから解説するわね」

「ういっす。それはいいですけど、これでここまで引っ張っという、あのアーパー吸血鬼世界と同じ設定だったら抗議の一つもきまずけど、その点は大丈夫ツすかー？」

「それはこの話を読んだ人の自由な解釈だから先生わかんない」ブリッコポーズを決めながらこちらに笑いかけてくる先生（推定年齢三十歳）。あたしはどついたるかいつて言葉を飲み込みつつ、こう思う。

この話の作者、いつでも逃げる気満々だ。

まー、あたしや、そんな行き当たりばったりの人間に創られた主

人公っすからー……まな板の上の鯉ッすからーそれに従うしかないんですけど。とりあえず、この話が固〇〇界だの、魔〇〇路だの、そーいったもんが平然とまかり通るような世界にならないよう祈っとくよ、心から。

「あー、えと……マイにゃん、そう言われるとこっちもものすごーく説明しにくいんだけど……」

「いや、別にいいんですけどね。この世に数多の作品が存在する以上、どこかの作品と設定が被るなんて事はざらですから。それにこっけて文句を言うなんてしないでですよ。あたし、烈〇の時だって突っ込みませんでしたし、あたしはフツーに面白かったですよ、アレ」

「うっわ、すごい投げやり。まー、さっきも言ったように思ううのは人の勝手だから。ほら、この話の作者が好きな言葉にあるでしょ『物語はその作り手の手を離れて読み手に渡ったときその読み手の物語になる』って」

「それ、ここで使う言葉かどうかは怪しいですけど、それは正しいと思います」

だからこそ、同人誌肯定派なんだけどね。ま、それは良いとして……。

「とりあえず、多分、これ読んでくれてる殊勝な人はこの世界での魔法と魔術の定義の違いに関して気になってると思うので、話戻した方が良くないですか？ 見捨てられそうで、あたしはとても大変な気分ですよ。つか、あたし達、何次元で会話してんでしょか？」

「多分、この世界とは遙か別次元にある世界であることは確かだねー」

「そーですねー……」

「……お前らそんな飛んでイスタンプールの遠い目をしてないでとっとと解説始めろ。文字数が勿体ねえから」

うん、レヴァンティバーナイスツッコミ！ つーか、このままいくと収集着かなくなりそうで、誰かのそのツッコミを期待してたの

だよっ！ つーわけで先生ッ！ 光速の速さで話を戻しましょう、
そうしましょう！

「そ、そうねっ！ それじゃ説明するわよ、満を持してっ！」

何か、ここまでするのに数十行使ったような気がしないでもない
けど、とにかく話を戻せたことを素直に喜ぼう。それでは先生解説、
お願いしますね。

先生は気分を切り替えるように、一度コホンッと咳払いをすると
黒板にチョークを走らせつつ、話し始めた。

「この世界での魔術というものは、基本的に自らの魔力（精神力、
生命力）を行使して引き起こす現象、もしくはその生物に与えられ
た能力の範疇を逸脱しない形で最大限に起こせる事象を指すわ。分
かる？」

聞いてくる先生にあたしは正直に答えとく。ま、理解できないこ
とはちゃんと理解しといた方が良さだろし。

「……前者の方はまあ、ゲームとかでよくあるので何となく分かる
んですけど、後者の方がいまいち」

「そう……ま、それなら前者の方も具体例挙げて説明するわ。それ
じゃ、よく聞いて。まず、最初に言った方だけど、これはあなたが
言ったようにテレビゲームに喩えると分かりやすいわね。つまりそ
の生物が持っている精神力、生命力——マジックポイントを使用す
ることで物理法則に基づいた現象を機械など用いることなく実行出
来るって事。もちろん、精神力とかは一般の生物だって持っている
けど、人の魔術師ってのはそれらを魔力という力に変換する『コン
バーター』っていう器官を体内に持っているわけ。それによって魔
力を創り、そういった現象を起こせるの。また、人によって命や精
神力に差があるように、その数値ってのは人によってまちまちで、
ゲームとかと違って通常の場合一生の間でほとんど増減しないんだ
けどね。他人から譲渡されたりした場合とか量が増える例外もある
けど、そんなのはごく限られた間柄だけでだし」

「他人から譲渡って……そんなこと出来るんですか？」

「血縁上近しい間柄なら、その成功確率は九割以上。魔力の質がよく似ているから譲渡しやすいのよ。その後に自身の魔力と馴染みやすいし。だから代々魔術師の家系では先代達が積み上げてきた知識の継承と共にその先代が魔力を譲渡することでその子孫の魔力を増大させて地位を確立させていくのが、この世界の常識の一つなの。魔力を渡した方は魔術師としての能力を失い、そのままの一月以内に衰弱死するわ。それはともかくとして、この学校でも最高位クラスに位置する子のほとんどが、そうやって魔力と知識を増強させた子供達ばかりだし」

「何かエライ事を事も無げにさらっと流しましたよね」
魔力譲渡すると、一月で死ぬとかなんとかその辺り。

「別に、それはこの世界の常識だし。と、言うか、生命力を譲渡するんだから死ぬのは当たり前でしょ？　だから、もし譲渡しない場合でも魔力を乱用しすぎて使い切っちゃったら、生命力や精神力を消失したのと同じ事になり、その生物は衰弱して死んじゃうし。ま、使い切らなければ、休息を取ることで回復できるけど……。魔力を譲渡する場合はそういうわけにはいかないから、その人間もその点は考えてるわよ。魔力を譲渡するときは大体自分の死期が近付いた時かもしれない。魔力を失っても寿命を延ばす事が出来る時よ。あなたの世界でもあるでしょ？　延命治療とか。それをさらに自立活動出来るようにしたもので、魔術の中でも魔法に近い術の一つ。術式を刺青みたく身体に直接施すことで人並みの寿命まで暮らすことが出来るようになるのよ。もちろん、非常に高価だし、それに魔力は回復せず――つまり魔術は使用不可になり、肉体的にノガ○リヨウタ○ウ並の虚弱体質になっちゃうから、このやり方はメリットが低いわ。だから大抵、自分が死ぬ直前に子孫に魔術を譲渡するのが一般的ね」

「先生……あたしの記憶からある意味間違った知識を得ちゃってますね……話の流れ的には物凄く理解しやすいですけど」

「ツツコミありがとう。ま、それはともかくとして、ここまでは理

解出来た？」

「ま、大体は。あと、今の会話で思ったんですけど、この学校に来ているのはそんな魔術師の家系の連中ばっかってことですか？」

「そういうわけでもないわ。魔術師ではない家系でもごく稀に『コンバーター』を持つ者が生まれる場合があるの。そういった子供達も僅かだけど、ここに来てるわ。もし、その子が魔術師となればその家系は貴族の『伯爵』クラスの待遇になるから、親もなければのお金をはたいてね」

「あー……エトナちゃんとかがそれですか」

「ええ。でも、元々一般の出だから、魔力を扱うにも知識、経験不足。それに魔力の絶対量が少ないからそこまで大成した魔術師になることは極めて稀なの。だから、そういった経緯でこの学園に入ってきた人の半分以上が半年を待たず退学もしくは魔力の暴走で死亡する。この学校の十二年の課程を修了するまでにそんな子が残ることが出来る可能性は千人に一人くらいね。あなたの知ってるエトナたちは何とか食らい付いてる方だけど……十年以上経ってもほとんど魔術を行使できないのよね……まあ、あの子の場合、才能がないって言うよりも、それ以外の要因で魔術をコントロール出来てないんだけど……」

「それ以外の要因って？」

「あー……ゴメン、これは話せないんだ。ちょっと訳ありでね」

先生が困ったように笑ってくる。うーん、ちよつと気になるけど、人のプライバシーに関わることを根掘り葉掘り聞くのも、なんか嫌だし……。ま、これから付き合っていくんだし、一緒に行動してたらエトナちゃんの魔力のコントロールが出来ない原因も見えてくるかもしれないし。ま、ここは今、追求しなくてもいいや。

ま、とにかく。

「ありがとう、先生。大体理解出来ました」

「そう？　なら、後は生物の範疇を……ってのの説明に移るわね」

「はい」

あたしは軽く頷くと、また話を聞く体制に入った。なんだかんだ言っても、何か興味出てきたしね。さて、それじゃ続きお願いします、先生。

「その話をする前にさ、一つ。マイにゃんってさ、頭良いから、今までの会話で気付いているかもだけど、この世界では魔術を使えるのは人間だけじゃないんだ」

「まー、さっきから度々生物って言ってましたし。多分そうだろうーとは思ってましたけど。やっぱドラゴンとかいるんですね」

「うん、理解が早くて助かるけど、全くもってその通り」

「で、それが今からの話と何か関係あるんですか」

「うん、大あり。でも、ひとまず念頭に置いておいて欲しいのが今話しているこの『魔術』『魔法』という概念は人間が考え創り上げたと言うこと。つまり、それを捉えているのが人間であるという点に注意してほしいの」

「あー……ひょっとして……」

それを聞いて何となく答えが分かったあたし。なるほどなー。人間を本位として捉えるって事はつまり……。

先生は少し困ったようにあたしを見てから肩を竦める。

「全く……これだけ説明して理解されると、ちょっとあたしの立場がないけど……それが正解かどうか確認してあげるわ」

ほれほれ、言ってみれ、と笑顔で先生。

うーん………少し自信ないけど……。

「えと……それじゃ分かりましたけど……間違えてたら指摘してくださいよ」

あたしは一言断ってから話し出した。

「人を本位として捉えて魔術というモノの名前、理論が考えられているとすると、こういう答えが導き出されます。人が持つ能力の内、道具、機械を用いず物理法則に干渉し、物理現象や物体をその根本から指向性を持たせた変質……つまり、物理法則の範囲内という制約はあるが、術者の思い通りに物質、または現象を変更出来る力を

ため息を付きつつ、両手を腰に当てる。

いや、みの付く人の真似はさすがにまずいっすよ、先生……しかもかなりネタ古いし。まー……今でも使ってる人いるらしいけど……。

イヤ、まあ、それは良いとして……。

「あの、先生、笑ってごめんなさいですけど、あたしの答えって当たってたんですか？ それ聞いとかないと、やっぱスッキリしないです」

やっぱり、それが気になった。

すると、先生はあさつての方向を見ながら髪の毛を掻き上げると、こちらを見据えて、笑う。

「フフ……正解よ、マイにゃん。ホント、理解力高いわね。何でそんなに頭回るのに外国語がボロボロなの？ それが不思議よね」

「あー……物事を分析するのとかは得意なんですよ、昔から。外国語が苦手なのは……まあ、多分、頭の中で無意識にこんなモノ生きていくのに必要ないって考えちゃってるのが原因じゃないかと……脳に入ってくるの無意識にガードしちゃうんですよねー……そのせいで単語帳全ページ百回書き取っても二十分の一も憶えてないんですよ。この間のテストでも平常点入れて赤点ギリギリセーフだったし……」

「あー……それはホントにご愁傷様。でも、マイにゃんは異世界に来ちゃったんだからもうそんなこと関係ないんじゃない？」

「そう思うならこんな話振らないでくださいよ……軽くトラウマになっちゃってるんですからあ。アルファベット見るだけで目眩してくるんですから」

思わず涙目。ふん、別に外国語が出来なくたって生きていけるもんっ！ 受かる大学ないって言われたけどねっ！

あああああゝっ！ また気分が暗くなってきた……。ウツダシノウ。

「いやいやいや……そんなどこかの絶望な先生やHIKIKOMO

RIみたいな事言わないで。大丈夫、あなたはそんなテストを受ける必要のない世界に来たんだから。そんなこと、忘れて忘れて」

「先生、どこかの新興宗教の勧誘みたいですね」

「あんたは……慰めてやってんだから、素直に喜びなさい」

「ふ……ふあい……すひませんでひた、へんへい……」

先生は据えた瞳であたしに笑顔を送りつつ、思い切りあたしのほつぺたを引っ張ってきた。びよーんと左右に伸びるあたしの桜色の頬。ふみゅうっ痛い痛い痛いっ！！限界越えて伸びちゃうよっ！ガ○デカみたいな顔になっちゃうよっ！

「あたしのどこがテロ活動しちゃう宗教組織の人間なのよ、失礼しちゃうわね」

「ふええーん……はなひてくらはいよう。それときけんはつげんきんひでふう。あたひももういいまへんらはー」

眼に涙を溜めて懇願するあたし。先生離して……もうホント反省してるから！

「へー……マイにゃんってほつぺた面白いくらい伸びるのね……しかも、何か泣いてるマイにゃんって可愛い……」

って先生？ 何で顔を上気させてんですかっ？ ハアハアして顔近付けないでくださいっ！ ひよっとしてDS？ DSなの！？ たーしーけーてーレヴァンティバーッ！！

「おおおおお……美人女医にセーラー服女子校生がそんな風に迫られてるのなんて、初めて見たぜっ。これは目に焼き付けとかないとなっ！」

「ドアホ——！！！！！！！！！！」

あんたはそっち系の趣味あんのかーっ！！ つーか、この世界セーラー服美少女女子校生なんているわけ無いんだから初めて見るの当たり前だバカやろーっ！

とにかく、このままの展開いかんではこの物語をブログに載せられない状態になる可能性がッ！ こ、これはダメっす、やばいっす！「ら、らめえええええええっ」

→とりあえず叫んでみた。

って、何これーっ！　これだけ読んだら青少年の健全な妄想を刺激しちゃう叫び方になってるよっ！　って、そんなことはどうでもいいっ！　一つ一つ説明するたびに何脱線しまくってんだ、この物語はっ！

よし、話を戻そう。絶対戻そう。そのためにはまず……。

あたしの上に興奮しながらのしかかってきてる先生を殺そう。うん。

「先生、最後いくよ？　いい？　答えは聞いてないっ！」
うおりあああああっ！

「クライ○○クスフォーム登場おめでとうございまーすっ！（先生）」

「……ダイナ○○クチョップ……」

フツ……こんな時に通信教育で合気道やっておいて良かった。
さて……。

あたしは壁にぶち当たってノビている先生に一瞥をくると、乱れた制服を整えながらレヴァンティバーに向き直った。

「さて……とりあえず先生があんな状態になったから、あんたが説明してよ。この世界での『魔法』に関して。その方が早そうだし」とすると、レヴァンティバーは引きつった声を出しつつ、

「わ……分かった。真面目にいくから……壮絶な顔で笑いかけないでくれっ！！」

「フッフッフ……最初からあたしの必殺技を喰らいたくなければ」とっとと説明しなさい。とりあえず、あと数行で」

「マジ！？　無理無理むーりっ！！」

「無理でもやれ」

「わ……分かったよ……だから、こっちを呪い殺しそうな顔すんなって……『魔法』についてだったな」

「ん。魔術の説明が足りてないってコメントが来たら設定説明とか色々継ぎ足すつもりだから。とにかく早くしろ」

「あー……分かったよ。この世界での『魔法』ってのは簡単に説明すると……って、これ元々ブログだから文字数足んねえや」
「うおおおおいっ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9352c/>

神薙姫～かんなき～She is killer of Gods

2010年11月24日09時16分発行